

ASIA Indicators

定例経済指標レポート

アジア経済の底堅さも先行きに依然不透明感 (Asia Weekly (9/7~9/11))

~景気刺激で内需に底打ち感も海外経済の動向が年後半の鍵~

発表日: 2009年9月14日(月)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 西濱 徹 (03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
9/7 (月)	(台湾) 8月輸出 (前年比)	▲24.6%	▲29.8%	▲24.4%
	8月輸入 (前年比)	▲32.3%	▲37.9%	▲34.1%
	8月消費者物価 (前年比)	▲0.81%	▲1.01%	▲2.32%
	(マレーシア) 7月輸出 (前年比)	▲22.8%	▲24.4%	▲22.7%
	7月輸入 (前年比)	▲16.0%	▲21.5%	▲20.9%
9/9 (水)	(豪州) 7月小売売上高 (前月比/季調済)	▲1.0%	+0.5%	▲0.8%
9/10 (木)	(ニュージーランド) 金融政策委員会 (政策金利)	2.50%	2.50%	2.50%
	(韓国) 金融政策委員会 (政策金利)	2.00%	2.00%	2.00%
	(フィリピン) 7月輸出 (前年比)	▲25.4%	▲20.8%	▲24.8%
	(豪州) 8月失業率 (季調済)	5.8%	5.9%	5.8%
	(マレーシア) 7月鉱工業生産 (前年比)	▲8.4%	▲10.5%	▲9.5%
	(インド) 8/29 時点卸売物価 (前年比)	▲0.12%	▲0.09%	▲0.21%
9/11 (金)	(中国) 8月消費者物価 (前年比)	▲1.2%	▲1.3%	▲1.8%
	8月小売売上高 (前年比)	+15.4%	+15.3%	+15.2%
	8月鉱工業生産 (前年比)	+12.3%	+11.8%	+10.8%
	1-8月都市部固定資産投資 (前年比)	+33.0%	+32.7%	+32.9%
	8月輸出 (前年比)	▲23.4%	▲19.0%	▲23.0%
	8月輸入 (前年比)	▲17.0%	▲10.5%	▲15.0%
	(インド) 7月鉱工業生産 (前年比)	+6.8%	+7.0%	+8.2%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[インド] ~景気対策による内需の堅調さが牽引し、生産は拡大基調での推移が続いている~

11日に公表された7月の鉱工業生産は、前年同月比+6.8%と前月(同+8.2%)から伸び率は鈍化したものの、昨年12月に一時マイナスとなって以降は1月から7ヶ月連続でプラス推移が続いている。世界金融危機後の景気対策や大胆な金融緩和により、自動車販売台数が急回復するなど個人消費の勢いが回復していることに加え、年明け以降は世界経済の底打ちを背景に輸出も回復しつつあり、生産の押し上げに繋がっている。4-6月期の実質GDP成長率は、前年同期比+6.1%(要素費用ベース)と前期(同+5.8%)から伸びが加速しており、先行きも堅調な推移が期待されている。ただし、足元では春先以降の商品市況の上昇や、モンスーン期の少雨による食料価格上昇懸念からインフレ圧力が高まりつつある。なお、先行きの景気に過熱感は乏しい状況が続くとみられ、金融当局は当面緩和政策を継続して景気刺激を図ると予想される。1日に公表された製造業PMIは5ヶ月連続で50を上回る推移が続いており、新規受注も50を上回るレベルで推移していることから、当面の生産は拡大基調が続くと期待される。

図1 インド 鉱工業生産の推移(前年比)

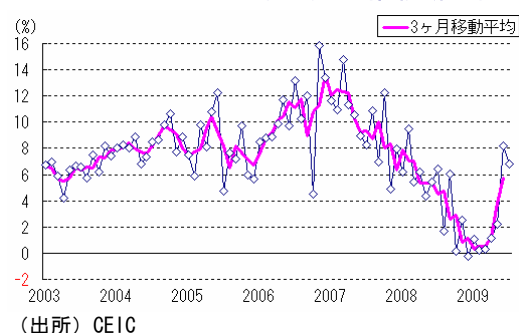


図3 インド 輸出入の推移(前年比)

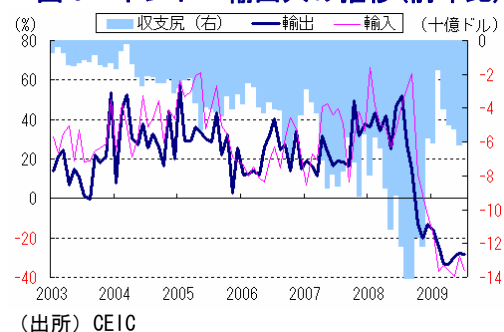


図5 インド インフレ指標の推移(前年比)

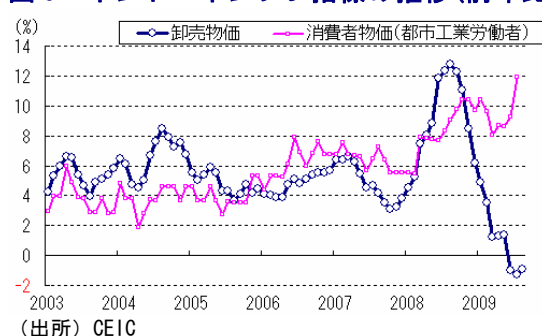


図2 インド 自動車販売台数の推移(前年比)

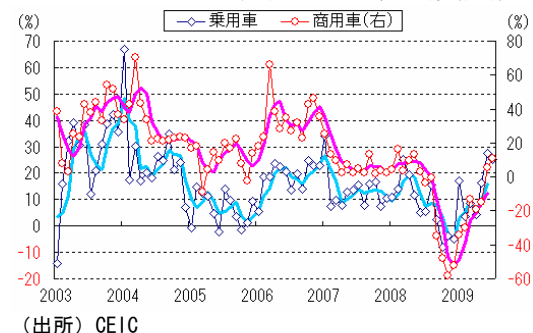


図4 インド 実質 GDP 成長率の推移(前年比)

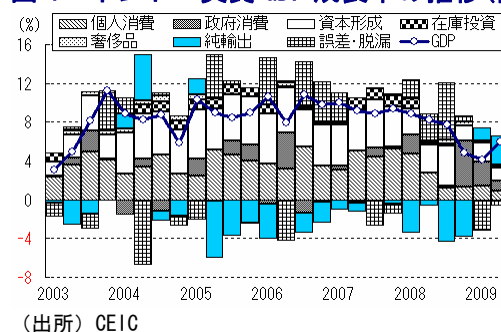
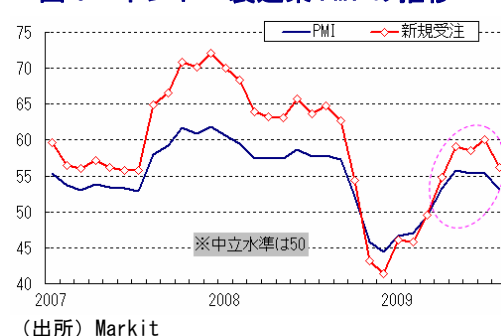


図6 インド 製造業 PMI の推移



【マレーシア】 ~内外需の底打ちで生産の回復が続くも、輸出依存度の高さから海外経済の動向に注意~

7日に公表された7月の輸出は、前年同月比▲22.8%と前月(同▲22.7%)から▲0.1p マイナス幅が拡大した。しかし、輸出額は前月比で300億リング程度(約10億ドル)拡大し、1月からは約3割程度上昇するなど、世界経済の底打ちとともに回復が進んでいる。同国の輸出産業は先進国向けの高付加価値品が多いが、年明け以降中国向け(含、香港)が牽引役となり輸出の回復が進んだ。また、前半はアジア諸国の景気が急回復したことで、アジア向け輸出も底離れが進んでおり、足元では欧米景気の底打ちから徐々に先進国向けも回復が進んでいる。年後半は中国の需要の伸びに頭打ちの懸念が出始めていることから、主要輸出先である欧米の景気回復の進捗が、先行きの輸出の鍵を握る。一方の輸入は、前年同月比▲16.0%と前月(同▲20.9%)からマイナス幅が縮小した。4-6月期の実質GDP成長率は、前年同期比▲3.9%と前期(同▲6.2%)からマイナス幅が縮小したが、特に景気対策の効果で個人消費など内需が底堅く推移したため、季節調整試算値ベースでは前期比+3.0%という急回復を遂げた。その旺盛な内需を反映して輸入は拡大が続いており、貿易収支は+78.10億リングに黒字幅が縮小した。ただ、依然貿易黒字幅は大きく対外面での強固な信用力を保っている。

10日に公表された7月の鉱工業生産は、前年同月比▲8.4%と前月(同▲9.5%)からマイナス幅が縮小した。輸出の底離れに加え、政府の自動車買い替え支援策や補助金政策などで個人消費などの内需が底堅いことを映して生産の回復が続いており、7月の生産はリーマン・ショックが直撃した昨年9月のレベルを回復した。

ただし、主要輸出先の欧米景気の動向を鑑みれば、年後半の生産の回復速度は緩やかになる可能性が高いと思われる。

図7 マレーシア 輸出入の推移(前年比)

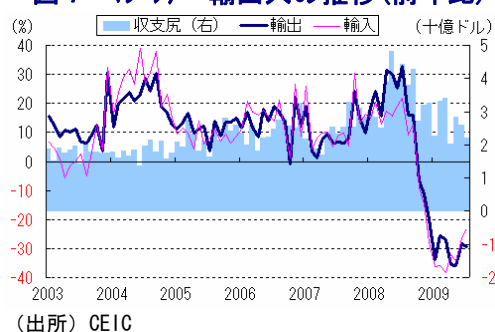


図8 マレーシア 中国・香港向け輸出額の推移

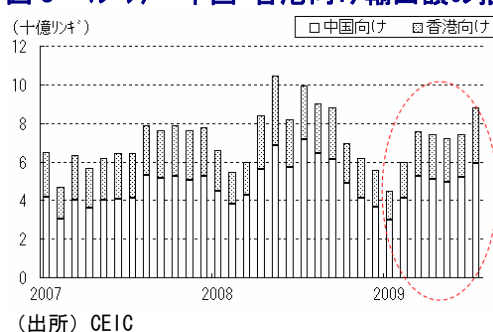


図9 マレーシア 実質 GDP 成長率の推移(前年比)

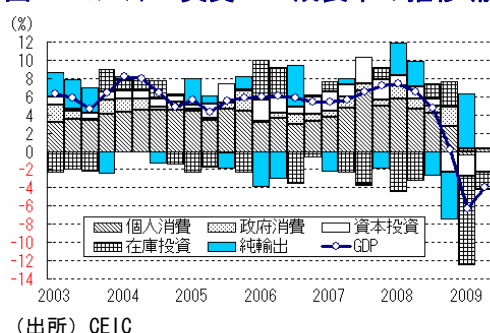


図10 マレーシア 鉱工業生産の推移(前年比)

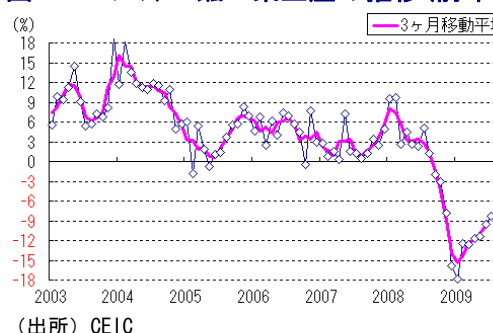
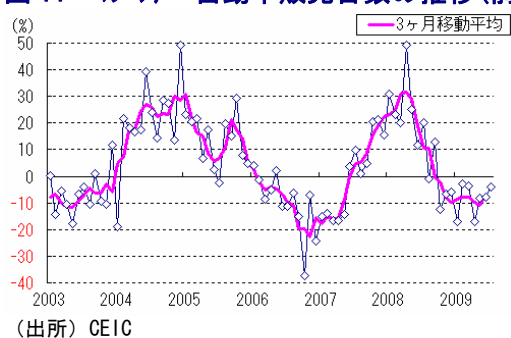


図11 マレーシア 自動車販売台数の推移(前年比)



【豪州】 ～昨年度の景気対策効果に剥落懸念。先行きの回復の持続性は、海外経済の動向が鍵～

9日に公表された7月の小売売上高は、前月比(季調済)▲1.0%と前月(同▲0.8%)から2ヶ月連続でマイナスとなった。政府による給付金などの景気対策により、昨年末を底に回復基調が続いてきた個人消費だが、その効果に息切れ感が始めている模様である。なお、政府による住宅取得支援策や金融当局による大胆な利下げにより建設許可件数は急回復が続いているものの、住宅融資残高の伸びはここにきて頭打ち感を強めている。4-6月期の実質GDP成長率は前期比(季調済)+0.6%と前期(同+0.4%)から加速し、年前半は順調な景気回復が続いてきた。7月からの新年度予算では再び給付金支給のほかインフラ開発など公共事業の拡大が図られる見通しだが、政府内では早くも緊急避難的な景気対策からの「出口」論も議論され始めており、今後の政策如何では年後半の景気回復のペースは緩やかなものに留まる可能性も考えられる。

10日に公表された8月の失業率(季調済)は5.8%と前月と同じであった。なお、雇用者数(季調済)は前月比で▲2.7万人の減少と前月(同+3.4万人増)から減少したが、世界金融危機後は正規雇用者の減少が続く一方、調整弁として非正規雇用者が増減する状況が続いている。景気は底離れが進んでおり、新年度予算での公共事業拡大などもあり、雇用の悪化は底打ちが近いとみられるものの、今後は輸出の回復速度が鍵を握る

とみられる。

図 12 豪州 小売売上高の推移(前年比)

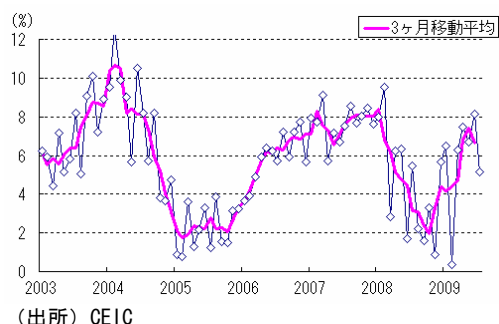


図 14 豪州 建設許可件数の推移(前年比)

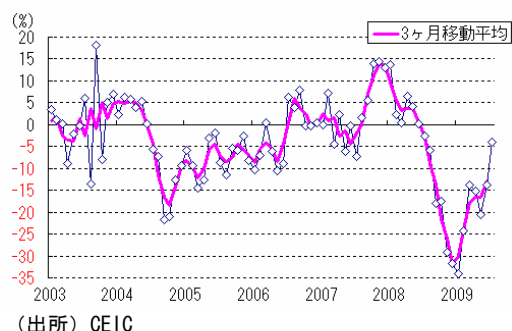


図 16 豪州 雇用環境の推移

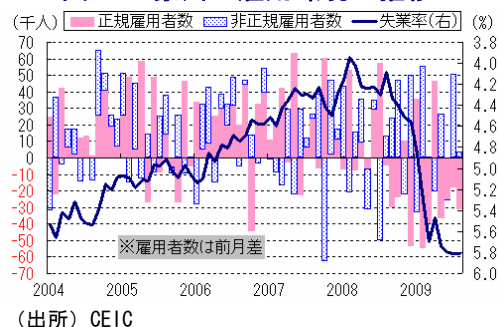


図 13 豪州 実質 GDP 成長率の推移(前期比/季調済)

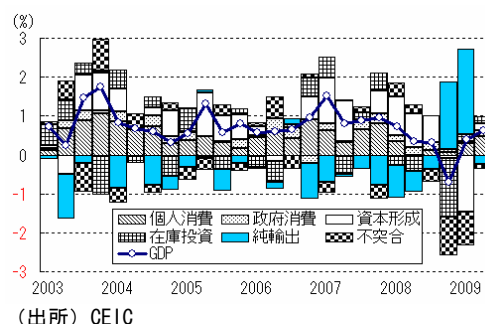


図 15 豪州 住宅融資残高の推移(前年比)

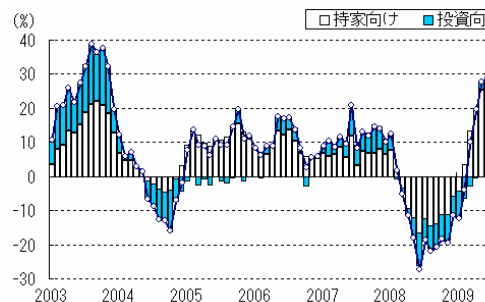
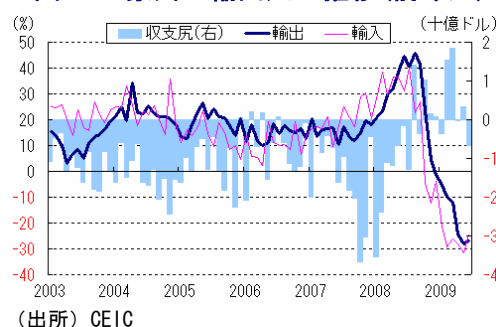


図 17 豪州 輸出入の推移(前年比)



[ニュージーランド] ～景気対策による内需押し上げに早くも息切れ感。金融緩和での景気刺激が続く～

ニュージーランド準備銀行は10日、定例の金融政策を開催し、3回連続で政策金利を2.50%に据え置く決定を行った。同委員会後の声明では、主要貿易相手国である豪州やアジア諸国の景気が4-6月期に急回復するなど外需の底打ちが進んでいることに加え、政府の景気対策やこれまでの累計575bpもの大胆な利下げの結果、足元では小売売上高に底打ち感が出るなど、個人消費に回復感が高まっていることを指摘した。さらに、大幅利下げにより、一昨年の住宅バブル崩壊以降低迷が続いてきた住宅販売も急回復している。しかし、こうした好材料がある一方、雇用環境の悪化は続いており、雇用・所得環境の厳しさを背景に自律的な景気回復は容易でないと認識している。他方、世界的なリスクマネーの動きが再び活発化する中、豪州と同一視され内外金利差に着目した投資資金が回帰し、年明け以降通貨NZドルは為替高基調が続いている。同国の輸出はGDP比30%強であり、経済の輸出依存度は必ずしも高くないが、近年は商品市況の高騰による交易利得の拡大が景気押し上げに寄与してきたため、通貨高による輸出競争力の低下が景気を下押しする可能性がある。さらに、政府は7月からの今年度予算で当初予定されていた所得税減税実施を撤回しており、それも景気を下押しすると懸念される。声明では、2010年後半にかけて現行水準以下での金融緩和政策を続けるとしており、早くも利上げ観測が高まっている豪ドルとの為替レート差は拡大するとみられる。

図 18 ニュージーランド 政策金利の推移

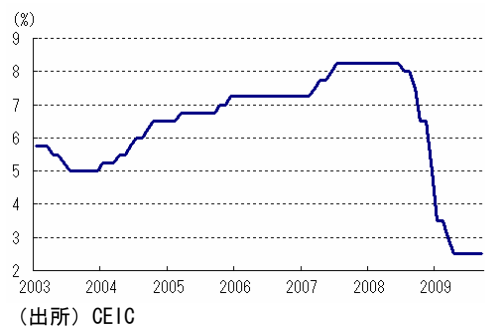


図 19 ニュージーランド 輸出入の推移(前年比)

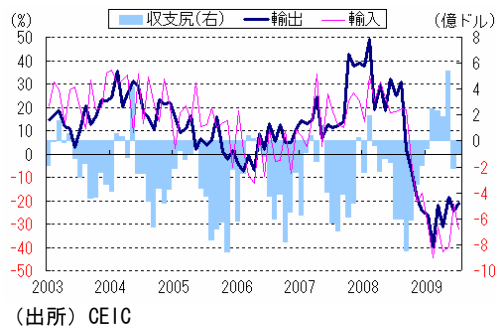


図 20 ニュージーランド 小売売上高の推移(前年比)

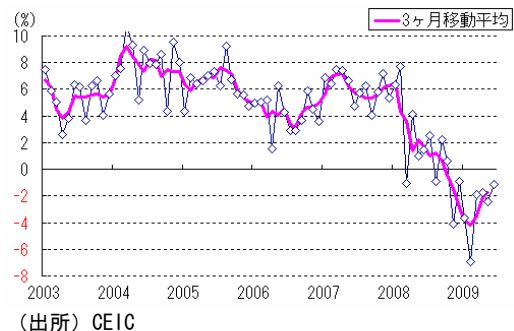


図 21 ニュージーランド 住宅販売戸数の推移(前年比)

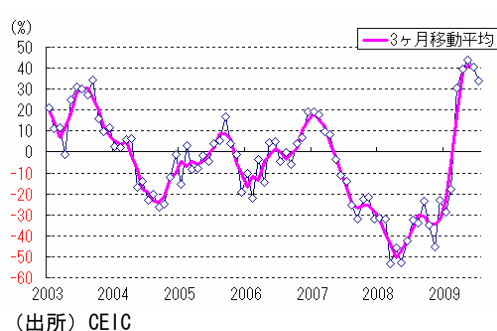


図 22 ニュージーランド 雇用環境の推移

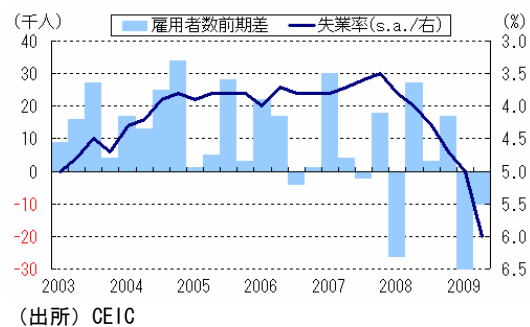
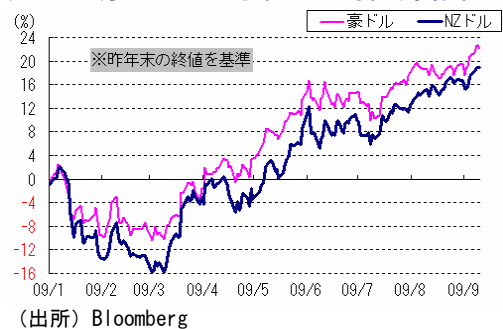


図 23 ニュージーランド 為替相場の推移



図 24 豪州-NZ 対米ドル為替騰落率の推移



以上